

紅樓夢
上

中国古典文学大系 44

平凡社

紅樓夢 上

曹霑作 伊藤漱平訳

訳者紹介

いとうきよへい
伊藤漱平 1925年愛知県生。東京大学文学部卒。東京大学教授。専攻 中国文学。主要訳書・論文「紅樓夢評論」(平凡社「中国現代文学選集」1)「われら愛情の種をまく」(平凡社「中国現代文学選集」13)「曹霗と高鶚に関する試論」(「北大外国語外国文学研究」2)「嬌紅記」(平凡社「中国古典文学大系」38)

中国古典文学大系 全60巻

紅樓夢(上)

第44巻

1969年1月6日 初版第1刷発行
1983年6月15日 初版第11刷発行

定価 2,700円

訳者 伊藤漱平

東京都千代田区三番町5番地

発行者 下中邦彦

発行所 郵便番号 102
東京都千代田区
三番町5番地 株式会社 平凡社
振替・東京8-29639

不良本のお取換えは直接読者サービス係まで 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい(送料は小社で負担します)。 製本 株式会社 石津製本所

© 株式会社 平凡社 1969 Printed in Japan

紅
樓
夢（上）〈家〉および主要人名表

《家》

買家 さる王朝の名門貴族。開国の元勳の末裔に当たる。

望国邸 (東屋敷) 望国公買演の子孫。三代目の敬は隠居、一子の珍が当主。都長安の寧栄街に在住、本籍地金陵省の石頭城(南京)に留守宅がある。

荣国邸 (西屋敷) 荣国公買源(演の弟)の子孫。三代目の敬が当主。

史家 保齡侯尚書令史公の子孫。史彌が当主。荣国邸の姻戚で、本籍地は金陵、長安に在住。

王家 都太尉統制果伯王公の子孫。王子騰が当主。荣国邸の姻戚。本籍地は金陵、長安に在住。

薛家 紫薇(中書)舍人薛公の子孫。薛蟠が当主。戸部(大蔵省)御用達をつとめる豪商。荣国邸の姻戚で、本籍地金陵に在住。長安はじめ各地に支店がある。

林家 列侯林公の子孫。林海が当主。荣国邸の姻戚で、本籍地は金陵、任地揚州に在住。

《主要人物》

二人宝玉(瓜二つの貴公子)

賈宝玉 この小説の主人公。買家荣国邸の若君。賈政(赦の弟)の次子。

寶石(通靈宝玉)を口中に含んで誕生し、祖母史氏(買の後室)の寵愛を一身に集めている(書齋の名を絳芸軒といい、大観園落成後は園内の怡紅院に住む)。

乳母—李氏 趙氏 張氏 王氏

侍女—(花)襲人 はじめ買の後室に仕え、ついで史湘雲に、さらに宝玉つきに転じ

た主思いの溫柔賢明な少女。

晴雯 後室つきから宝玉つきとなった見目よく心利きたる少女。

麝月 秋紋 碧痕 茜雪 檀雲 紫綉 紅玉(小紅) 佳蕙

蕙香(四兒) 綺霞 麝兒

從僕—李貴 趙亦華 張若錦 王榮

書童—茗烟(焙茗) 引泉 鋤藥 掃花(掃紅) 墨雨 伴鶴 挑雲

雙瑞 雙寿

甄宝玉 金陵省仁林院總裁甄公の子。南京在住。買家の姻戚に当たる。買宝玉とは年輩・容貌・性格まで酷似。

金陵十二釵(金陵出身十二美人)

林黛玉 この小説の女主人公。林海の愛娘。買宝玉より一つ年下で父方の従妹に当たる。病身で神経質ながら才貌ともにくれた少女。

母の死を機にその実家の荣国邸に引きとられる(大観園では瀟湘館に住む)。

乳母—王氏

侍女—鸚哥 改名して紫鵑 買の後室からつけられた少女。

雪雁 買家からつれてきた少女。春纖

薛宝釵 薛蟠の妹。買宝玉の母方の従姉に当たる少女。聡明で重厚な

人柄、才貌は黛玉に匹敵する(上京中、大観園では蘅蕪苑に住む)。

史湘雲 両親を幼時に失い、叔父の史鼎に養われている。買の後室は

その従祖母。不幸にもめげぬ快活な気性の少女。

乳母—周氏

侍女—翠縷

賈元春 宝玉の姉。才徳すぐれ、宮女に召されて貴妃として入内する。

侍女—抱琴

賈迎春 賈赦の娘(妾腹)。優柔で事なかれの性格(大觀園でははじめ綴

錦閣に、のち紫菱洲に住む)。

侍女—司棋 繡橘

賈探春 宝玉の異母妹(生母は側室の趙氏)。賢明でしっかり者(大觀園

では秋爽斋に住む)。

侍女—侍書 翠墨

賈惜春 賈珍の妹。孤僻な性格だが、絵心がある(大觀園では蘅香榭に

近い蘅風軒—暖香坞に住む)。

侍女—入画 彩屏

王熙鳳 賈璉(赦の長子)の妻。金陵の王家の出、賈政の奥方王氏の姪

に当たる。男まさりの気性の持ち主で、後室の寵と奥方の信頼と

を待み、榮国邸の奥向きを切つて廻す辣腕家。

侍女—平兒 照鳳が嫁入りのとき実家から連れてきた腹心。 豊兒

書童—彩明

賈巧哥 巧姐とも呼ぶ(もと大姐と呼ばれていた)。璉と照鳳の娘。

乳母—李氏

李 執 原国子監祭酒(大学総長)李守中の娘。賈珠(宝玉の兄)未亡人。

忘れ形見の賈蘭の養育に専念している貞淑な婦人(大觀園では稻香

村に住む)。

侍女—素雲 碧月

秦可卿 營繕郎秦業の養女(孤兒院からもらい受けた)。賈蓉(珍の子)に

嫁した。黛玉・宝釵の双美を兼ねた佳人。

侍女—宝珠 瑞珠

妙玉尼 蘇州生まれの若い有髪の尼僧。読書人の家に育ち文筆に長

じているが、性格は狷介(大觀園では栊翠庵に住む)。

賈家の人々(一一男子)

賈敬 代化の子。進士出身。隱居して郊外の道敎寺院で仙人になる修

業に凝っている。

賈珍 敬の子。寧国邸の当主、祖職を継ぎ威烈將軍を襲っている。

賈蓉 珍の子。国子監学生。秦可卿はその妻。

賈赦 代善の長子。榮国邸の当主。

賈璉 赦の長子。王熙鳳はその妻。

賈琮 赦の次子(妾腹)。

賈政 代善の次子。赦の弟。宝玉の赦父で工部(建設省)員外郎。

賈珠 政の長子。宝玉の兄だが、秀才の学位を得ながら夭折した。李

執はその妻。

賈環 政の第三子(妾腹、生母は側室の趙氏)。愚鈍で陰險な性格。

賈蘭 珠の遺兒。

賈瑞 賈代儒(賈家の家塾の塾長)の孫に当たる青年。

賈菴 寧国邸正系の支孫に当たる青年。

賈芸 賈家一族の青年。

賈芹 賈家一族の青年。

賈家の人々(一一女子)

賈の後室(史氏) 賈代善の未亡人。寧・榮両邸を通じて賈家最高の権

力者。金陵の史家の出。信心深い。

侍女—(金)鴛鴦 後室一番のお気に入り。 鸚鵡 琥珀 珍珠

以上榮国邸

奥方の邢氏 賈赦の妻。

侍女―秋桐

奥方の王氏 賈政の妻。宝玉の母。金陵の王家の出。

侍女―彩雲 彩霞 金釧兒(姉) 玉釧兒(妹) 繡鸞 繡鳳

側室の趙氏 賈政の第二夫人(探春・環の生母)。

侍女―小吉祥兒 小鶯

側室の周氏 賈政の第三夫人。

若奥方の尤氏 賈珍の妻。

侍女―万兒 銀蝶兒

(以上榮國邸)

その他の人物(二―男子)

林海 字は如海。黛玉の父。進士出身の官僚で塩政等を歴任。

王子騰 王家の当主。奥方の王氏の兄、照鳳の叔父に当たる。

王仁 王熙鳳の兄。

史鰌 史家の当主。湘雲の叔父。

薛蟠 薛家の当主。宝釵の兄。

秦鐘 字は鯨卿。秦業の子。可卿は義理の姉。宝玉の学友となる。

馮紫英 神武將軍馮唐の子。

蔣玉菡 忠順親王府お抱えの俳優(小旦役)。芸名は琪官。

甄費 字は士隱。蘇州閶門外に住む田舎紳士。英蓮(香菱)の父。

賈化 別号は雨村。浙江省湖州の出身。進士に合格し辣腕官僚となる。同姓のよしみで賈家の同族に連なり、賈政と往来する。

その他の人物(二―女子)

薛未亡人 薛蟠・宝釵の母。

女中―同喜 同貴

香菱 本名甄英蓮。誘拐されて薛家に売られ、のち薛蟠の妾となる。

女中―臻兒

劉婆さん 世故にたけた寡婦。娘を王家の遠縁に当たる王狗兒に嫁がせた。

智能兒 水月庵(饅頭庵)の若い尼僧。

文官 元春の里帰りの余興用に十二人で編成された賈家お抱えの少女芝居一座の座頭格(旦役)。

芝居 少女芝居一座の小旦役。

齡官 少女芝居一座の小旦役。

(以上寧國邸)

目次

〈家〉および主要人名表……………前付 五

第一回……………三

甄士隱 夢路に奇しき玉を見しること
賈雨村 浮世に妙なる女を恋うること

第二回……………三

林夫人 揚州の城市にて身まかること
冷子興 榮家の歴史をば説きさること

第三回……………三

林如海 義兄に託し訓教に報ゆること
賈後室 外孫を迎え孤児を惜しむこと

第四回……………四

薄命の女 偏えに薄命の男子に遇うこと
葫蘆の僧 乱りに葫蘆の判決を下すこと

第五回……………五

幻境に遊ばせ 十二釵の絵を解くこと
仙酒を飲ませ 紅樓夢の曲を演ずること

第六回……………六

賈宝玉 初めて雲雨の情を試みること
劉姥姥 一たび榮国の館に参ずること

第七回……………六

宮花を届けしに 賈璉 照鳳と戯れ居たること
寧國邸の宴にて 宝玉 秦鍾と顔を合わすこと

第八回……………七

通靈に比し 金簪少しく意を露わすこと
宝釵を探り 黛玉なれば嫉妬を抱くこと

第九回……………七

風流を慕い 情友 家塾に上がること
嫌疑を招き 頑童 学堂を聞がすこと

第十回 一三四

金寡婦 利を貪ほり一時の辱を受くること
張大医 病を論らい仔細に源を窮むること

第十一回 一四四

寿辰を祝い 寧邸 家宴を設くること
照鳳に逢い 賈瑞 淫心を起すこと

第十二回 一五五

王熙鳳 むごくも相思の計を設くること
賈天祥 まともに風月の鑑に照らすこと

第十三回 一六三

秦可卿 死して竟禁尉に封ぜらるること
王熙鳳 援けて寧国邸を取りしめること

第十四回 一七五

林如海 家さかり揚州城にみまかること
賈宝玉 路すがら北静王にまみゆること

第十五回 一八六

王熙鳳 鉄檻寺にて策を弄すること
秦鯨卿 饅頭庵にて味を占むること

第十六回 一九六

賈元春 才をもて鳳藻宮に召さるること
秦鯨卿 若くして黄泉路を辿りゆくこと

第十七・十八回 二二一

大観園に才を試み 対額を題すること
米国邸に親を省し 元宵を賀すること

第十九回 二四三

情の極み 良宵に花の人語を解すること
意は長く 静日に玉の異香を生ずること

第二十回 二六二

王熙鳳 正言もて妬意を弾くこと
林黛玉 俏語もて嬌音を諷うこと

第二十一回 二七三

賢明の襲人 嬌嗔もて宝玉を戒むること
機転の平兒 軟語もて賈璉を救くこと

第二十二回 二八四

曲文を聞き 宝玉 禅機を悟ること
燈謎を作り 賈政 讖語に嘆くこと

第二十三回 三〇〇

西廂記の妙詞 戯語に通すること
牡丹亭の艶曲 芳心を響むること

第二十四回 三二一

醉金剛 財を軽んじ義侠を尚ぶこと
癡女兒 帕を遺して相思を惹くこと

第二十五回

魔魔の法に 叔嫂、五鬼に逢うこと
紅樓の夢に 道靈 双真に遇うこと

三六

第三十二回

肺腑を訴え 心は迷う 活ける宝玉のこと
恥辱を含び 情は烈し 死せる金釧のこと

四三

第二十六回

蜂腰橋に 言を設け密意を伝うること
瀟湘館に 春に倦み幽情を発すること

三四〇

第三十三回

手足既脱 すこしく唇舌を動かすこと
不肖種種 おおいに笞撻を承くること

四四〇

第二十七回

楊妃 滴翠亭にて五色の蝶に戯るること
飛燕 埋香塚にて残んの花に涙すること

三五五

第三十四回

情中の情 情によりて妹を動かすこと
錯裡の錯 錯をとらえ兄を誅めること

四五三

第二十八回

蔣玉蘭 情もて茜香の繩を贈ること
薛宝釵 羞みて紅麝の串を籠ること

三六八

第三十五回

白玉釧 親ら蓮葉羹を味わうこと
黄金鶯 巧に梅花絡を結わうこと

四六七

第二十九回

果報者 果報冥加に果報を禱ること
情の女 情厚き上にも情を虧むこと

三九

第三十六回

絳芸軒に 鴛鴦を繡い夢に兆すること
梨香院に 分定を識り情に悟ること

四八四

第三十回

宝釵 扇子に借り 一石二鳥を狙うこと
齡官 蓄字を書き 痴は局外に及ぶこと

四〇五

第三十七回

秋爽齋に 偶 海棠詩社を起すこと
蘅蕪苑に 夜 菊花の題を定むること

四七

第三十一回

扇子を撕き 千金の一笑をなすこと
麒麟に因り 白首の双星を伏すこと

四一七

第三十八回

林瀟湘 菊花の詩に魁奪すること
薛蘅蕪 螃蟹の詠に諷和すること

五二八

目次 4 第三十九回 …………… 三二

村の姥姥 口に信せ河を開くこと

情の哥哥 根を掘り葉を掘ること

第四十回 …………… 三三

買後室 二たび大観園に宴すること

金鷲鷲 三たび牙牌令を宣すること

解 説（付、「紅楼夢年表」）…………… 三五

大観園の図…………… 折込

買家世系図…………… 卷末

栄国邸内想像図…………… 卷末

恭王府平面図…………… 卷末

紅こう

楼ろう

夢む

上

—
もとの名『石頭記』
—

伊、曹

藤

漱

平、霏

訳 作



第一回

甄士隱 夢路に奇しき玉を見しること
賈雨村 浮世に妙な女を恋うること

まず詩をひとつ――

なにをあくせく浮世を渡る
はなの宴もいつか果てんに
嬉し悲しもまぼろしに似て
今はむかしの夢のはかなさ
涙の紅袖の重きはもとより
尽きせぬ情痴の恨みぞ長き
一字一字に血をにじませて
十年の辛苦げに尋常ならじ

さてみなさまがた、いったいこの物語はいかようにして生まれたとおぼしめす？ ことの起こりこそ作りごときですれど、よくよく味わっていただければ、ずいぶんと趣きも深いはず。さりながら、てまえその由来を説きあかさぬことには誠者も得心がゆかれますまい。

ほかでもない、女媧氏（神話時代の女帝）が岩を鍛えて天の破れをつくろつたときの話、大荒山（てたらめ山）の無稽崖（てまかせ谷）にて、高さ十二丈、四辺が二十四丈もあろうという荒岩を、三万六千五百と

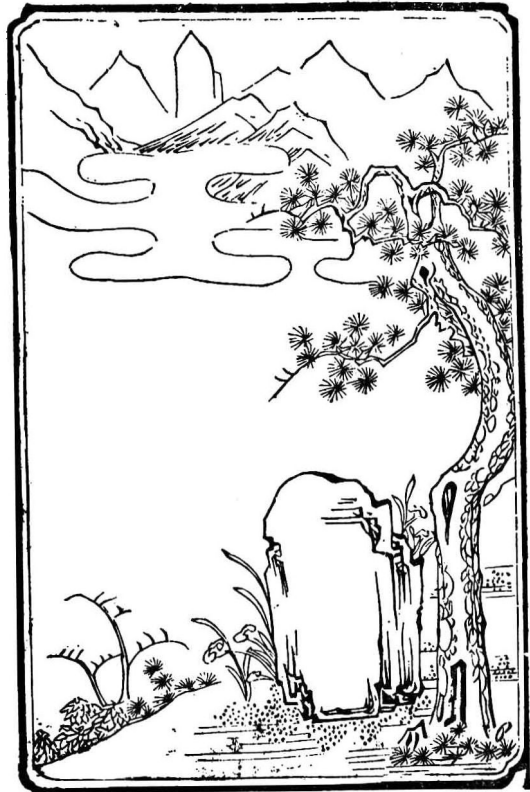
飛んで一個鍛えあげたのでしたが、この女媧、そのうち三万六千五百個まで使いながらただの一個使いあまし、それをこの山の青埂峯（あだなきげ峰）の下に捨ててしまったのです。ところがこの岩、なまじいに鍛錬を受けたばかりに知恵だけは一人前につき、仲間の岩がそろいもそろって天をつくろうお役に立てたというのに、自分だけ能なしで選にはずれたとばかり、くやしがつったり残念がつたり、まずは悲嘆と屈辱の明け暮れを送っていました。

と、ある日、おりしも岩がわが身の不運をかこっているところへ、ひょっこり現われましたのがあたりに見かけぬ僧と道士、二人連れではるかかなたよりやってきました。うち見たところ、骨格も非凡なら風采も俗人離れています。談笑しながら峰の下までくると、岩のわきに腰をおろして、声高にしゃべりまくるのでした。初めのうちこそ、雲の山だの霧の海だのと、仙人染みたつかまえどころのない話題ばかりでしたが、あげくに話が浮世の榮華富貴のさまにまでおよびました。この岩、これを耳にして、つい煩惱をよびさまされ、

へひとつこの身も下界へ降って、その榮華富貴とやらを味わってみたいもの……

と考えたのです。それにつけても口おしいのは、見るもぶざまなわが身の姿。やむなく人間のことを操って、くだんの僧と道士に話しかけました。

「もうし、お大師さまがたへ。てまえ、ご覧のがさつもの、ご挨拶も抜きで失礼いたしますが、ただいまお二かたのお話に出ました姿姿の榮耀榮華のさま、洩れうけたまわりますにつけ、いかにも慕わしくてなりませぬ。てまえ、身体つきこそぶざまでも、これであたまた方は存外ましなつもり。それにお見うけいたしたところ、お二かたとも俗ならぬおおいでたち。よもや尋常のおかたではござるまい、さだめ



石頭

「次へと待ちうけておつての、またたき一つ、息一つするあいだにも、『楽しみの絶頂で悲しみが生じ、人がくたばって物が換わる』、とどのつまり、『ひっきょう夢の世、万境もついに空』というわけじゃ。まずゆかぬが無難じやろうて」

ところが岩ときては、娑婆見たさのほせあがっていますもので、こんな言葉に耳をかすわけがない。そこでまたしつこくせがみます。二仙も無理に思いきらせることはできぬとさとり、ため息まじりに、「はてさてこれも、『静が極まって動を思い』、『無から有が生ずる』という定めじやろうて。よからう、そういうことなれば、これからおまえを連れていって楽しませてやるでしょう。なれど、いざ思うにまかせぬときになって、よいか、後悔してもおそいぞよ」

「もとよりのこと、ご念にやおよびませぬ」と、岩。すると、その僧がまたいって、

「おまえ、あたまはあるというふれこみじやが、こう見たところぶざいくで、とんと珍重のしようとなないな。このままで所詮ろくな目は見られまいて。よからう、愚僧がこれからひとつ大いに法力をふるって、おまえに力添えしてやろうわい。劫の果てる日が来たら、生まれながらの姿にもどし、この件にけりをつけるぞよ。どうじゃ、それでよいの？」

これ聞きました岩、願ってもないことと、ありがたがるまいことか。僧はそこで呪文を唱えお札を書き、大いに幻術の腕を揮い、さしもの大岩をも、みるみるきれいにすぎ透った美しい玉に変えてしまっ

し天をつくらぬ世を救い、物を活かし人をも助けられようご才徳の御持ち主であろうと見当をつけました。お慈悲でござります、てまえを浮世にお連れくださるわけにはまいますまいか？ 仰せの富貴の地、溫柔の郷とやらで何年かを楽しく過ごさせていただけますれば、いつまでもご恩に着ます、忘することではござりませぬ」

聞きおわった二仙、これにはそろって吹き出し、笑いながら、「善哉、善哉！ したが、かの浮世には、楽しい事もあるといえはあるが、永久にはあてにならん。それにまた、『欲いえはきりがなし、いいところでも邪魔が入り』などい言葉そのままできことが、次か

たばかりか、扇の根付ねつけくらいの大さきまで縮めてしまいましたので、身にさげることもできれば、手ににぎることもできるほど。

僧は手のひらにのせて、笑いながら、

「宝物らしい恰好かたじけなくだけはついたが、これはという見どころとなると、まだからつきしじや。ここはもう一骨折ひとこしりして、なんぞ文句でも彫りつけ、見るからに珍品だとわかるようにしておいてやらねばなるまい。そうしておけば、いや栄えに栄えてある國、学問の香もゆかしい高貴の家、花柳繁華はなろうの地、溫柔富貴の郷へおまえを連れてゆき、落ちついて分を榮しめるよう計はかってやるとしても、なにかと好都合であるうしな」

岩はそう聞いてうれしくてたまらず、それではとたずねました。

「いったいてまえにかほど珍しいところをお授けいただけますので？　なおまた、てまえをどちらへお連れくださろうというので？　ひとつ、てまえにも得心のゆきますように、はっきりお示ししただきとうございます」

僧は笑いながら、

「まあ、聞かぬが花じゃ。さきへゆけば、いやでもわかることゆえな」

そう言い聞かせてこの玉たま(岩)を袖にしまいこみ、くだんの道士と連れ立って飄然ひょうぜんと立ち去るのでしたが、してどこの家指さしてゆきましたものか……。

それからまたどのくらい年月がたちましたか知れませぬ。たまたま空空道人くうくうだうじんなる者が道の師を求めて、ここ大荒山は無稽崖、青埂峯の下を通りかかり、大岩の上に文字もくつきり、話もありありと刻みこんであるのを眼にとめました。空空道人が初めのあたりを一読しました

ところ、なんとそれこそは、天をつくろう役に立たなかったこの岩が、姿を変えてこの世に降り、茫茫ぼうぼう大士と渺渺みょうみょう真人の手引きをえて浮世のまんなかに連れてゆかれ、ひとわたり人の世の離合の哀歎を味わい、現金な娑婆の風にも吹かれるという見聞記。

そのさきには、さらに一首の偈ぎがあつて――

天をつくろう才さいもなきまま

仇あだに浮世に過あぐすいとせ

この身の閑あひらせし三世の物語ものがたり

たれを頼たのみて世に伝えなん

この詩のあとには、いよいよこの岩の落下した土地、腹を借りたさきから始めて、自身のたどった経験談がおかれ、そこには家庭内の奥向きのこまごました事柄から、つれづれのすさびになる詩のたぐいまで至れりつくせりにそろつていて、氣ばらし・うさばらしの種かたくらしいにはなりそうです。ところが、いずれの御代みよの、いずこの國のできごとかという点になると、かにもく触れていないので、調べようもありません。これではと空空道人、そこで岩に向かつて、

「岩君いわた、きみのこの物語じゃが、ご当人の口ぶりで見ると、捨てがたいところもあるゆえ、ここに書きつづつておいた、いずれ世間に奇談として披露したいと、こういうわけじゃな。ところで拙僧の考えでは、第一に年代の調べようがないし、第二に大賢人・大忠臣が朝廷で政治をとり、風俗を正すといった善政の話がとんと見当たらず。ありようは、いくたりかの風変わりな女子たちが、それもやれ情に厚かつたとか癡ばかじゃつたとか、やれこざかかった、行ないすましておつただのというだけの話、班姑はんこ・蔡女さいにょのごとき才徳そなえた女性も登場せぬよ



僧道(茫茫大士・渺渺真人)

利いておりましよう。要はその内容の道理になつたところを見てくださればよろしいので、なにも年代年号などに拘わられることはござりませぬ。それに世間の俗人で、好き好んで政治向きの固くるしい書物など読もうというのはごくくまれ、気晴らし用の肩のこらない読物がいいというのが、ことのほか多いものでござります。

まずこれまでの小説体の史書と申せば、君主や宰相をけなしてみたり、他人の妻君や娘にけちをつけてみたり、その淫らがましくあくどいふしぶしは一々あげきれませぬ。そのほか恋愛物というのがあって、淫らで鼻もちならぬ毒筆をふるい、良家の子弟をわるくしているのが、また数えきれぬほど。才子佳人を扱ったのとなると、これがまた千篇一律ときていて、おまけ

に内容もとかくきわどいことに触れないわけにはゆかず、どの頁を開けても、潘安・子建だの西子・文君だのがさばることに相成ります。要するに作者が手前味噌の恋愛詩を二、三首作中にとりこみたいばかりに、男女二人の姓名をひねりだすようなもの。そこへもってきて、お決まりの小人物をワキ役に登場させて二人の仲をかき乱させる。これも芝居の道化役そのままで、おまけに女中ふぜいが口を開けば『なり、けり、かも』口調——美文調でなければ議論調じゃべるといふのですからおそれいます。

というわけで、順をおって見てまいると、どれもこれもたがいに矛盾している上に、あまりに筋道のとやらぬ話ばかり。それにくらべ

うじゃ。拙僧が写していつてみたところで、世間の連中が愛読してくれよう見込みはまず……」

岩が笑つて答えますには、

「これはお坊さまともあろうかたが、なんとたわけたことを仰せで！ 年代の調べようがないということであれば、これからつまりお坊さまが漢なり唐なりの年代を借りて来てくつつけられたらよろしいので、なんの難しいことがござりませうか？ ただ、てまえ思いまするに、これまでの小説体の史書は、その点どれを取っても似たりよつたりで、二の舞い踏まなかつたこちらのの方が、いっそ変わりばえもして、気が